

シンガポール在住外国人ピアノ教師を対象とした熟達化過程の質的分析

于欣田*, 北村 勝朗**

*東北大学大学院教育情報学教育部

**東北大学大学院教育情報学研究部

要旨：グローバル化時代と言われる今日において、教え学ぶ関係においてもそうしたグローバルな視点が求められる場面がみられる。教育場面においても、外国人教師が異国での指導熟達化をどのように果たしているのか、といった課題は、今後、人材の流動性が高くなるとされる現代社会において重要な課題となり得る。本研究では、外国において教師として音楽の指導にあたる外国人教師を対象とし、かれらがどのように異文化理解、コミュニケーション、指導内容・方法の再構築といった課題に対峙しているのか、シンガポールの外国人ピアノ教師を対象とし、質的に考究することを目的とした。分析の結果、外国人教師の熟達化は「指導観の再構築」「学びの視点からの発想」および「継続的な熟達への志向」の3つのカテゴリーによって捉えることができることが明らかとなった。

キーワード：外国人教師、指導熟達化、異文化理解

1. はじめに

教師の熟達研究において、技術的熟達者モデルから反省的实践家モデルへの転換の重要性が指摘されている。この点に関し、佐藤・秋田(1990)は、初任教師と熟練教師による同一の授業のモニタリング過程に現れる思考活動を対象とした研究を行っている。そこでは、熟練教師の「実践的思考様式」の特徴として、次の5点が挙げられている。①即興的思考において表現される、②授業の状況に、積極的、感性的、熟考的に関与している、③総合的な視点で複雑な状況に対する多義的な事実の解釈、④生起する問題事象相互の関連をその場面に即して構成する文脈化された思考、および⑤授業の事象の相互の複雑な関係を発見する過程で、その授業に固有な問題の表象を再構成する思考方略。こうした実践的思考様式の研究に代表されるように、教師の熟達研究においては、状況を熟考し、解釈し、関係を発見していく思考活動をいかに高めていくかが重要な鍵となっている。

また、岸野・無藤(2006)は11名の熟練小学校教師のライフストーリー研究により、専門性の向上転機での内的な過程に焦点を当てた研究を行っている。その研究の中で、教師としての専門性の向上における転機での変化は二つに分けられる点が明らか

とされている。すなわち、第一に、教師の目線の教育観から子どもの目線の教育観への変化、第二に、与えられた指導法・技術から自分なりの役割を創造する教師という力量の変化である。

一方、教師の熟達化に焦点を当てた研究の中には、音楽教師の研究も数多く存在している。そうした音楽教師の研究においては、教師自身のスキルの向上だけではなく、音楽教師として、音楽という教育的価値観を通して生徒にどのような影響を及ぼすかといった点も重視されている。この点に関し、Cavaye・西山(1987)は、音楽教育においては演奏技術の習得を目的とするだけでなく、教師と生徒の人間関係を介して育まれる生徒の人格的成長が重要である点が指摘している。

また、Teachout(1997)は、「最初の3年間の経験のなかで、どのようなスキルや行動が音楽教授の成功に重要であるか」とについて、40項目の問いに対する教育実習生と熟練教師の反応を比較分析している。その結果、「熱心でエネルギーである」、「生徒の行為を維持する」、「忍耐力を持つ」の項目に関して、熟練教師は高く評価していたのに対し、教育実習生は高く評価していなかった。この結果から、音楽教師の力量感と熟達化には関係がある点が指摘されている。

また、菅（2002）は、音楽の授業を実施する上で重要となる教師の力量について40項目のアンケート調査を行っている。因子分析の結果、「基礎的授業スキル」、「人間関係配慮」、「権威性」、「心がけ」および「主体性支援」の5つの因子を抽出している。ここでは、生徒と「関わる力」に関し、教育実習生では十分な認識が得られていない点が課題として指摘されている。指導の場面では音楽活動を組織するリーダーとして「関わる力」が重要である点が明らかとされている。

こうした研究の蓄積により、音楽の教授場面におけるかかわりや、音楽教師としての熟達化過程におけるかかわる力の重要性が明らかとなってきた。しかし、社会の多様な場でグローバル化が急速に進む中、異文化の視点から音楽の教授学習、あるいは音楽教師の熟達化に関する研究の蓄積は未だ十分とは言えない。

現代社会において、世界各国がそれぞれ自国の成長を牽引する教育の充実が図られており、そうした中であって、教師は貴重なグローバル人材として必要されている。この点に関し、山岸（1995）は、多文化共生社会における教育として、国際理解教育、多文化教育、異文化間教育、異文化間コミュニケーション教育研究の重要性を指摘している。これらの教育目的をめぐる議論においては、多文化共生社会に求められる能力として、外国語の運用能力や海外事情に関する知識だけでなく、ものの見方や世界観、対人関係態度などを含めた、より実践的な力を重視する能力観が語られている。したがって、音楽の教授学習においても、異文化を視野に入れた指導熟達化の研究は不可欠であると言える。

実際、音楽の指導において、海外で活躍する音楽教師は多く存在しており、異なる文化や価値観をもった学習者および指導者を対象とした教育に関する研究の必要性は高い。しかしながら、異文化間教師に関する研究において、語学教師を対象とした研究の蓄積は数多く存在するものの、音楽教師を対象とした研究の蓄積は未だ不十分である。ここで、語学教師を対象とした先行研究について、いくつか概観したい。

まず、海外で教える教師に求められる資質に着目した研究として、平畑（2007）による研究があげられる。平畑（2007）は、海外での日本語教育経験を

持つ172名の日本人日本語教師を対象に質問紙調査を行い、海外での活動に必要と考えられる資質を分析している。分析の結果、「コーディネート能力」、「国際感覚」および「日本人性」が海外で望まれる日本人日本語教師の資質である点が明らかとされている。また、意欲と人間性を高めることが、海外での活動にあたって必要となる点、およびコーディネート能力は国際感覚の獲得につながる、あるいはその前提となる可能性がある点も指摘されている。

また、矢野（2004）は、「学習者の日常生活を考慮した海外における初級日本語教育」と題する研究の中で、海外の教育現場の現状と今後の課題について以下2点を挙げている。すなわち、第一に、学習者の文化と日常生活に焦点を当てることの重要性、および教師にとっての異文化、すなわち現地の生活の理解を深めることの重要性を理解すること、第二に、コミュニケーション重視の日本語教材、カリキュラムの開発が求められる点、の2点である。

こうした語学教育を対象とした研究から得られる知見から、音楽教師の熟達を考える上でいくつかの重要な示唆が得られると考える。すなわち、学習者の日常の中に存在する文化をいかに理解し、音楽の教授場面に反映させるか、という、異文化を視野に入れた実践的思考様式の問題が重要である点である。そこで本研究では、異国で音楽指導にあたるピアノ教師を対象とし、異文化を視野に入れつつ音楽教師の熟達化過程を明らかにすることを目的とする。本研究では、シンガポールで活躍する外国人のピアノ教師を対象とした。シンガポールの労働人口の現状は外国人労働力が全体の3分の1を占めており、人材の流動性が高くなるというグローバル化社会が端的に現れている。音楽教育においても同様に、外国人のピアノ教師も多数存在している。

2. 方法

2.1 対象者

対象者の選定は次3つの基準により行った。

- 1) シンガポールでピアノを教える外国人教師として10年以上の指導歴を有している。
- 2) 優れた演奏者や学生、後輩を継続的に育成している。
- 3) シンガポールの音楽学校からピアノ指導者としての高い客観的評価を得ている。

対象者4名が全ての基準を満たすことを確認した。対象者は、男性1名、女性3名で、ドイツ籍指導者2名、中国籍指導者2名であった。指導者の平均年齢は38.5歳、平均指導歴は15.8年であった。

2.2 データ収集

調査は、一対一の深層的 (in-depth)、自由回答的 (open-ended)、半構造的 (semi-structured) インタビューにより実施した。調査に先立ち、共同研究者間でインタビュー質問項目の吟味を行った上で、インタビューガイドを作成した。インタビューは、対面のインタビュー及びSKYPEを使った遠隔インタビューにより、英語および中国語で実施した。インタビューの平均時間は約60分で、すべて第一執筆者が実施した。インタビュー内容は対象者の承諾を得た上で全て録音された。

2.3 データ分析

インタビューによって得られたデータは中国語でテキスト化された後、以下4つのステップにより分析が行われた。①言語の翻訳：得られたデータは全て日本語に翻訳された。②意味内容要素の切り出し：日本語データとしてテキスト化されたデータから、本研究の分析対象となる、ひとつの意味のまとまりを持った発話 (meaning unit) の切り出しを行った。③サブカテゴリー作成：発話から解釈される意味が類似した意味内容要素を、それぞれのデータが得られた文脈を考慮しつつ、上位概念で括れるサブカテゴリーへと再編成し、それぞれに標題をつけた。④カテゴリーの作成：サブカテゴリーを、更により上位の概念で括られるまとまりとしてカテゴリーに集約していき、それぞれのカテゴリーに標題をつけた。上記の分析作業は全て質的研究の経験を10年以上有する研究者による共同で実施した。

3. 結果および考察

分析の結果、114の意味内容要素が得られた。そこから「教師の役割の再認識」、「学習者の動機づけへの視点の転換」、「言葉の背後に存在する文化の理解」、「目標に合わせた指導内容の再編」、「状況に応じた指導方法」、「指導者自身の学びの発見」、「指導熟達への省察」、「学習者価値観の理解」および「指

導に対する継続的な探索」の9サブカテゴリーが生成された。この9サブカテゴリーは、「指導観の再構築」、「学びの視点からの発想」および「継続的な熟達への志向」の3つのカテゴリーに集約された。表1に階層的カテゴリーおよび主要な発話を示した。以下カテゴリーごとの内容の詳細について、発話と分析をまとめる。

3.1 指導観の再構築

このカテゴリーは、「教師の役割の再認識」、「学習者の動機づけへの視点の転換」および「言葉の背後に存在する文化の理解」の3つのサブカテゴリーから構成されており、音楽教師としての指導観を再構築する過程について説明するカテゴリーとして作成された。対象者は、異国で教師として指導する過程を通して、自分の母国の指導観との違いを再認識している。それにより、指導観の変化が生じ、学生に対する考え方も変化している。

(1) 教師の役割の再認識

すべての対象者が、異国での音楽の指導体験から、ピアノの指導における大前提としての指導観について、改めて自問する場が生まれることによって、教師としての役割が再発見されている。「教師の役割の再認識」のサブカテゴリーは、こうした、教師としての自身について深く問う体験を説明するサブカテゴリーとして作成された。

ドイツの指導者Aは、「教師の役割の再認識」に関し、曲の教え方の流れにおいて次のように述べている。

「シンガポールでは、曲の理解よりスキルを重視します。そのため、曲の説明は短くなってゆき、スキルの指導を丁寧に教えます。教えるというより曲へ導くという役割ですね。」(ドイツ人指導者A)」

「以前は学生に興味を持たせる事がすごく重要であると思っていました。教師の役割は、教えるよりも学生に興味を持つ事がもっと重要だと。でも、ここでは逆効果になりました。学生に興味ないもの押し付けると、ピアノを嫌いになります。やはり、学生に納得できる方法で教えれ

表 1. 階層的カテゴリーおよび主要な発話

カテゴリー	サブカテゴリー	主要な発話
指導観の再構築	教師の役割の再認識	教師の役割は、教えるよりも学生に興味を持つ事がもっと重要だと。でも、ここでは逆効果になりました。
	学習者の動機づけへの視点の転換	学生の動機づけをうまく導いて、ピアノをしっかり身につけさせたいと考えています。
	言葉の背後に存在する文化の理解	英語ができれば問題が解決するわけではなく、文化の違いによって、話し方や単語の意味も違います。
学びの視点からの発想	目標に合わせた指導内容の再編	教材は全て統一されており、学生も同じ教材で授業して欲しいと考えています。
	状況に応じた指導方法	練習する時、先にこの曲のストーリーをイメージしてから練習しています。
	指導者自身の学びの発見	自分は学生になって、単語を一つ一つ教えてもらいます。学生と会話する時に使うと、学生との距離感がぐっと近くなります。
継続的な熟達への志向	指導熟達への省察	その時気付きました。自分はピアノに対する知識が少ないなって。
	学習者価値観の理解	様々な民族の学生について学ぶ事を通して、学生を深く理解し、心理的な距離も縮められる事になります。
	指導に対する継続的な探索	異文化を理解することで、学生を理解でき、いい教師になれます。

ば、学生は自分からピアノを好きになってくれます。」(ドイツ人指導者B)

また、シンガポールという異国の教育環境で教師として熟達が進む中で、教師という職業の認識そのものが変化している。こうした新たな認識を持つに至った点について、ある対象者は次のように述べている。

「中国では、教師はすごく敬意を持たれる職業です。学生や保護者に尊敬され、授業の中心に位置する存在という印象があります。でも、シンガポールでは教師はサービス業の一種類に過ぎないのです。シンガポールの保護者はたいへん忙しいため、教師への評価は学生から聞いています。学生がある教師を嫌いであれば、すぐ教師を変えるのです。それだけではなく、たまに学生に厳しい指導をしたら、クレームも来るのです。」(中国人指導者A)

「まず、学生と友達になって、それからピアノを教えます。シンガポールの子供はとても自立的です。リーダーの目線で教えると受け入れてはもらえません。友達みたいに、授業の雰囲気も柔らかくなっていきます。」(中国人指導者B)

(2) 学習者の動機づけへの視点の転換

教師の役割に関する認識の変化に伴い、教師が中心ではなく、学生を中心として位置づけた指導へと変化している。そこでは、学生の動機づけを理解することが求められている。学生によって動機が異なるため、学生を中心に据えた指導においてはその指導法も異なってくる。更には、学生とのかかわり方も異なってくる。こうした、学習者の動機づけに指導者の視点が転換されていく体験に関し、ある対象者は次のように述べている。

「ドイツでは、ピアノの学習では、昇級テストに合格することよりも音楽を勉強したい、音楽を楽しみたいという学生が多いですね。シンガポールではテストを目的にする学生が多いです。学生自身の元々の考えが違います。」(ドイツ人指導者B)

「目的意識が強いのは悪い事ではないと思います。ただ、自分の国の子供とは違うので、ちょっと慣れていないんです。でも、学生の動機づけが違っていると教える方法も変わりますから。」(ドイツ人指導者A)

ここで注目される点は昇級テストを目的とした学習と、音楽そのものを楽しむことを目的とした学習の違いが存在することが再認識されている点である。また、それは、ピアノ学習の動機づけが、社会環境や国の文化によって異なるため、対象者の教師たちは、そうした異なる動機づけの重要性を理解し、再確認した上で対応している。こうした動機づけの重要性について、ある対象者は次のように述べている。

「中国ではピアノの昇級の証明書を取得するためのテストを重視します。学生達も級を取る事を目標としています。けれども、ピアノの基礎である楽譜を読む能力からしっかり勉強します。シンガポールの学生は、どちらかと言うとテストに出る曲を勉強したいという気持ちが強いように思います。ですから、どうやって曲を早く理解し、覚えるかが重要なんです。」(中国人指導者B)

「中国の子供はピアノを学ぶ以上、技として身につけたいのです。ピアノ証明書のテストはすごく重要である事は理解しています。でも、ピアノを宿題にするのは望ましくはないですね。できれば、学生の動機づけをうまく導いて、ピアノをしっかり身につけさせたいと考えています。」(中国人指導者A)

(3) 言葉の背後に存在する文化の理解

全ての指導者は、自国と比べた際、指導方法が異なる点を強調している。そのため、指導に際し、言葉の理解が必要である点が強く認識されている。教師として外国の職場で成長するためには、コミュニケーションの手段である言語能力が非常に重要であると考えられている。特にピアノの授業は対面で教える場合が多いため、学生と二人で対面する時、コミュニケーションの基本能力が要求される。この

点に関し、ある対象者は次のように述べている。

「一番慣れない事はやはり言葉ですね。シンガポールは英語が使えます。しかし、発音はちょっと違います。最初の一ヶ月は全然コミュニケーションができませんでした。でも、練習すればするほど上手になります。」(中国人指導者B)

「英語ができれば問題が解決するわけではなく、文化の違いによって、話し方や単語の意味も違います。それは全て気をつけています。」(中国人指導者A)

同じ言葉を使っても理解できない事もある点を全ての対象者が述べている。その一つの理由として、文化の違いが影響している点が述べられている。言葉の背後に存在する文化の理解により、コミュニケーションが円滑に進む体験が語られている。こうした言葉の背後にある文化を理解することの重要性に関し、ある指導者は次のように述べている。

「ドイツも普通に英語を使っています。同じ英語でも分からない事もあります。指導の中で、曲を理解しやすくするために、あるたとえを挙げて説明しました。でも、学生は全然理解できませんでした。言葉の意味は理解できます。しかし、何かにたとえた表現の意味は分からないのです。」(ドイツ人指導者B)

「学生がピアノに興味をもってもらえるように、ピアノで春夏秋冬を代表する音を聞かせました。でも、シンガポールは季節感があまりないので、学生にはよく分からなかったようです。」(ドイツ人指導者A)

このように、自分の国では一般的な指導観と自分の国では通じる言語表現は、異国ではそのまま通用するとは限らない点が認識されている。そのため、指導者としては指導方法を変えていかなければならない。このような点から、全ての対象者が、異国で教師としての熟達を望む際、まず指導観を再構築した上で、指導方法を変え、言葉と文化を勉強することが重要である点が認識されている。こうした指導観および指導方法にかかわる変化は、外国人教師と

しての基礎的な事項として全ての対象者が指摘している点である。指導観の変化の中心には、学生の視点および学生のもつ文化の視点が据えられ、指導がなされている。こうした指導の視点の変化と具体的な指導方法の変化は、異国で音楽を指導する教師の熟達化において重要な点として語られている。こうした点に関し、次に述べる「学びの視点からの発想」の категорияとしてまとめられた。

3.2 学びの視点からの発想

この категорияは、「目標に合わせた指導内容の再編」、「状況に応じた指導方法」および「指導者自身の学びの発見」の3つのサブcategoryからなり、学習者の目標や状況に応じた指導内容および指導方法を新たに組み立てていくことの必要性を認識すると同時に、指導者自身の学びの視点を再発見することで、学習者との関係性を構築していく重要性の認識について説明するcategoryとして作成された。

(1) 目標に合わせた指導内容の再編

ある対象者は、「目標に合わせた指導内容の再編」に関し、シンガポールでのレッスンの組み立てと自国のレッスンの組み立ての違いに触れ、次のように述べている。

「ドイツでは一つの曲を教える時、まず、1時間かけて曲を説明します。曲の背景や、表現すべき感情など、一つひとつ説明して、学生にしっかり曲を理解させます。シンガポールの学生は忙しいため、曲の説明より指使いを説明してもらいたいと考えているようです。」(ドイツ人指導者A)

「私は学生の性格によって異なる適切な教材を探し、授業を組み立てます。でも、ここシンガポールでは、教材は全て統一されており、学生も同じ教材で指導して欲しいと考えています。」(ドイツ人指導者B)

また、レッスンの時間配分も変化している。ある対象者は次のように述べている。

「中国ではピアノの基本とする指使いと楽譜を

読む能力をまず先に時間をかけて教え、その後で曲の指導に深く入っていきます。シンガポールでのレッスンでは、今の生徒はピアノの基本能力は十分に習得されていないため、毎回、指使いと楽譜の読み方から教えます。」(中国の指導者B)

(2) 状況に応じた指導方法

練習時間と練習方法に関し、全ての対象者が、その違いについて指摘している。練習での指導法の変化についてある指導者は次のように述べている。

「前の指導方法よりも、レッスンとして学生に与える時間がかなり増えました。というのも、シンガポールの子供はすごく忙しくてピアノの練習では興味をもって自分で弾いたり、自発的な練習が少ないんです。そのため、練習の時間が長くなって、自分で練習するより、レッスンの時間を使って練習するケースが多いですね。」(中国人指導者A)

練習時間とともに、練習方法の指導も異なっている。特に動機づけが異なると、練習の宿題も異なってくる。この点についてある指導者は次のように述べている。

「昔は授業の後、学生に感想を書いてももらったり、曲の事を調べてもらいました。シンガポールでは学生はこのような事をやる時間ないので、曲を暗記したり、指先の動きを覚えることが毎日の課題となっています。」(ドイツ人指導者A)

「ドイツでは、作曲家のストーリーは大概知っています。曲を練習する時、この曲の背景を考えながら練習します。次の授業は練習する曲の感想を先に聞きます。ピアノを弾くスキルではなく、この曲をどこまでわかることができるのかは重要なんです。シンガポールの子供は、曲についてあまり考えないように感じています。練習する時、先にこの曲のストーリーをイメージしてから練習しています。」(ドイツ人指導者B)

(3) 指導者自身の学びの発見

シンガポールでのピアノのレッスンに際し、学生に使う言語、異なる民族の学生の習慣、そして、学生が好きな学習方法まで、全て一から学んでいく必要があることを、対象者は認識している。「指導者自身の学びの発見」のサブカテゴリーは、こうした指導者自身の学びの体験について説明するものである。

学生の事を知るために、良い教え方を見つける必要があります、そのため、言語から仕草までを観察している。ある中国の指導者は、学生から学ぶ方法について、次のように述べている。

「英語で学生とコミュニケーションを取ります。しかし、シンガポール式な英語が出た時は、やはり分からないですね。その時、自分は学生になって、単語を一つひとつ教えてもらいます。この方法で英語の上達が早くなり、特に学生と会話する時に使うと、学生との距離感がぐっと近くなります。」(中国人指導者A)

「シンガポールはとても面白い国です。シンガポールは主に中国系、マレー系、インド系の民族で構成されています。いろいろな文化習慣や特別な行事があります。それは学生から教えてもらいます。さらに、様々な民族の人とかかわる時のマナーも教えてくれました。」(ドイツ人指導者B)

指導観の変化から、指導行動の変化が生じている。更に、学び続ける教師としての視点から、学ぶ行動が生じている。それが自身の熟達化につながっていると対象者は認識している。異国でピアノを教えることは、挑戦でもあり、また自身の成長にとってよい機会でもあり、同じ外国人教師との出会いもよい勉強になると捉えられている。こうした指導者自身の変化への気づきに関し、次に述べる「継続的な熟達への志向」のカテゴリーとしてまとめられた。

3.3 継続的な熟達への志向

このカテゴリーは、「指導熟達への省察」、「学習者価値観の理解」および「指導に対する継続的な探索」の3つのサブカテゴリーからなり、指導者とし

て昔の指導観と指導方法を再構築する体験とその過程について説明するカテゴリーとして作成された。指導観および指導法の再構築に際しては、自身の中での矛盾と葛藤を克服することが求められている。

(1) 指導熟達への省察

指導観と指導方法の変化は外国人教師にとって大きな体験として語られている。なぜなら、それは、それまで自身がもっていた、自身の文化をもつ指導法について省察し転換する事になるからである。指導者として以前の指導法を転換することは容易ではないが、しかし重要な体験であることは、全ての対象者によって語られている。この点に関し、ある対象者は次のように述べている。

「指導観念と指導方法の変化を迫られました。でも、本当に変えたくないし変える方法も知らないですね。先輩たちに悩みを相談したり、良い経験を教えてもらったりしました。そして、昔の教え方を全部捨てるわけではなく、良い所は残して、学生に納得できる形で教えるようにしていきました。」(ドイツ人指導者A)

「ずっと中国のピアノ教育を受けてきたので、ここで勉強になった事が二つあります。一つはピアノに対する理解です。先輩の先生から好きな作曲家を説明してくださいと言われた時、その作曲家の曲以外何も知らなかったんです。その時気付きました。自分はピアノに対する知識が少ないなって。もう一つは、教え方です。学生に教える時、間違っている所は分かっても、それをどう指導すれば分からなかったんです。先輩の指導から学び、自分の教え方も上達していったと思います。」(中国人指導者B)

指導者として指導方法を勉強し、それだけではなく、良い指導者との出会いによって自身のピアノスキルと演奏力を向上させていくことが重要であると認識されている。この点に触れ、ある対象者は次のように述べている。

「自分の変化と言えば、ここですごくいい先生と出会ったことです。先生からピアノの演奏を

指導してもらいました。ピアノの教師になるとピアノを弾くスキルが落ちます。その先生の指導のもとで新たな演奏方法を勉強し、技術的にも成長しました。」(中国人指導者A)

(2) 学習者価値観の理解

さらに、学生との関係も自身にかかわる変化とともに変化している。特に学生の価値観を理解し、学生の異国文化を学び、そして、学生に受け入れられる先生になることが重要である点が全ての対象者によって強く認識されている。「学習者価値観の理解」について、ある指導者は次のように述べている。

「シンガポールでは、様々な民族の学生がいます。各民族にはそれぞれ習慣や禁忌があります。だから、それを学ぶ事を通して、学生を深く理解し、心理的な距離も縮められる事になります。」(中国人指導者B)

「元々は同じ中国系だから、文化の障害はないと思っていました。でも、中国系シンガポール人は特別な民族性があります。中国の子供はレッスン中はあまり質問をしません。でも、中国系シンガポールの子供は細かな事についても質問します。そのため、授業の事前準備は以前よりも充実するようになりました。これも、学生から学ぶということですね。」(中国人指導者A)

民族の文化以外にも外国の社会環境と生活習慣の理解を通した、その国独自の社会的文化的背景を意識した学生の理解がなされている。学生に最も適切な指導方法を見つけることの重要性について、ある指導者は次のように述べている。

「最初は理解できない事や納得出来ない事でも、この国の事を知ることによって、一つひとつ理解することができました。学生達はこの国で生活しているから、考え方や勉強方法もその国に沿ったものになります。私は、そうした学生に一番良い指導法は何だろうかと考え直しました。」(ドイツ人指導者B)

「ものの見方や世界観、対人関係や態度などを

含めて、この国に来てから変わりました。でも、それは多分私が求めている能力です。異文化を理解することで、学生を理解でき、いい教師になれます。」(ドイツ人指導者A)

(3) 指導に対する継続的な探索

外国でピアノを指導する事は簡単な事ではなく、挫折や失敗を経てピアノ教師として成長してきた体験が全ての対象者によって語られている。その成長の表現は、より自信が高まり、問題の解決力も高まり、教師として自分自身の価値を認められるようになったと語られている。

ある対象者は指導者としての自信の変化について、次のように述べている。

「ドイツと言えば、ピアノの専門性が高いイメージがありますね。教師としてシンガポールで仕事を始めた時は自信満々でした。しかし、子供に嫌われ、学生を失ったことで、自分の指導力を疑い始めました。シンガポールの子供とドイツの子供は違います。同じ方法は通用しないんです。今、自分の教え方を再発見できて、シンガポールの学生によく認められることができました。今の自信は教師としての自信だけではなく、自分の能力に対する自信です。」(ドイツ人指導者B)

「長い時間ですが、でも、学生と向き合う時もっと自信になりました。シンガポールの学生を全て理解できるなんて無理です。やはり違う国の人なので、根を知る事はできないでしょう。でも、その異文化理解の意識は持っている。学生の声を聞いて、出来る限り学生の事を理解しようとしています。これも異文化を勉強する機会だと思います。この国の事を知ることによって、学生との距離も縮まっています。」(中国人指導者A)

また、問題の解決力に関し、ある指導者は次のように述べている。

「最初に感じていた不安や恐怖は全部解消しました。今は、どのような場面であっても、冷静

に対応できます。もうすでに一番難しい時期も体験しました。最初の段階が最も難しいですね。」(ドイツ人指導者B)

「不安や恐怖などがあります。一番怖いのは教師としての失格です。特に学生を失う時ですね。このような経験は今までなかったんです。でも、学生を知る過程で学びました。学生に適切な指導方法を見つけること、それは効率的な教え方ではなく、学生の民族や個性によって決められるものなんです。教え方の上達ということではなく、学生とコミュニケーションを取ることであり、学生によって教え方を変化させる、そのやり方を見つけました。」(ドイツ人指導者A)

「自分の考えや教え方がすべて正しい訳ではないんです。国と民族によって、自分の常識は通用しません。これは一番勉強になった事ですね。そして、この事が分かれば、問題解決場面でも緊張しません。」(中国人指導者B)

「問題解決で一番重要な事は、コミュニケーションです。意思疎通がうまく取れること。外国で働く人にとってコミュニケーションは単なる言語の問題ではなく、この国をどのくらい知っているか、この国の人をどのくらい理解しているか、この国の文化をどのくらい勉強しているか、という問題なんです。それが出来れば、問題解決は簡単になります。自分の国で教師として求められる能力と、異国で求められる能力は異なります。今の自分は、その異国で求められる能力を身につけることができたと思っています。」(ドイツ人指導者B)

こうした異文化理解についての認識に基づき、全ての対象者が理想的な教師像について語っている。ある対象者はこの点について次のように述べている。

「学生の願いを支援する上で、楽しく授業をやる教師が理想の教師像です。」(中国人指導者A)

「理想の教師は、学生達に好かれる教師。」(中国人指導者B)

「学生が心からピアノを好きになれる、そんな指導ができる教師が理想の教師ですね。」(ドイツ人指導者B)

「学生が好きな方法でピアノを学び、そして、ピアノの楽しさを体験させることができる教師が理想です。」(ドイツ人指導者A)

このように対象者は、理想の教師像をもった上で、異国での音楽教師としての指導観と指導行動に対する省察を繰り返し、転換を図っている。対象者それぞれの理想とする教師像は完全に一致するものではないが、学生の視点に立って学びを捉えている点、教師としての満足感は教師の仕事の中において得るものではなく、学生の満足する体験において得るものである認識をもつ点、および継続して探索し続けることの重要性の認識が共通していると捉えることができる。

4. 結語

シンガポールにおいてピアノ指導にあたる外国人教師の指導熟達過程は3つのカテゴリーによって捉えることができた。すなわち、それまで身につけてきた指導観について、教師の役割を再認識し、学習者の動機づけに基づく指導のあり方を再考する視点の転換を体験し、指導の際のコミュニケーションにおいて言葉の背後に存在する文化の理解を前提とした教え学ぶ関係性の構築という体験を通して再構築している。また、学習者の目標に沿った形で指導内容や指導方法を再編していく体験とともに、自身の指導熟達化を継続して追及していく省察の重要性が強く認識されていた。

そうした体験および認識は、外国という異文化社会での指導体験が省察の契機となっている点が推察された。指導熟達化を考究する上で、指導者と学習者の間に存在する文化的な差異の省察と探索という視点は重要であると考えられる。

本研究においては、いくつかの課題も残されている。第一に、外国人ピアノ教師の熟達化過程において、異文化理解の重要性は指摘されたものの、そうした異文化理解をいかにして進めていくのか、その詳細については未だ明らかにされていない。第二に、本研究はシンガポールにおける外国人ピアノ教師を対

象者としているが、他の文化社会的環境において、本研究で得られた知見がどのように関係するのか、検討が必要であると考ええる。今後の研究課題とした。

参考文献

- 秋田喜代美 1996年 教える経験に伴う授業イメージの変容比喩生成課題による検討 Japanese Journal of Educational Psychology, 1996, 44, 176-186
- Cavaye R.・西山志風 1987年「日本人の音楽教育」新潮選書
- 平畑奈美 2007年「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化ー海外教育経験を持つ日本人日本語教師への質問紙調査から」早稲田日本語教育学 第5号
- 菅裕 2002年「音楽科教育実習生の教師力量観に関する研究」宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第9号, 125-138, 2002
- 岸野麻衣・無藤隆 2006年「教師としての専門性の向上における転機：生活科の導入に関わった教師による体験の意味づけ」発達心理学研究 17(3), 207-218, 2006-12-20
- 坂本篤史 2011年 授業研究を通じた小学校教師の授業を見る視点の変化ー 授業研究に携わった経験に対するM-GTAを用いた教師の語りの分析 教師学研究10. 25-36, 2011
- 佐藤学・秋田喜美子 1990年「実践的思考様式に関する研究ー熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に」東京大学教育学部紀要 第30巻 Teachout, DavidJ. "Preserviceandexperiencedteachers' opinionsorskillsandbehaviors importanttosuccessfulmusicteaching." Journal of Research L'n Music Education Vol.45
- 山岸みどり 1995年「異文化間能力とその育成」『異文化接触の心理学』(渡辺文夫編著), pp. 209-223 川島書店
- 矢野葉子 2004年 「学習者の日常生活を考慮した海外における初級日本語教育」 昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要 2, 110-117, 2004-04-30

Qualitative investigation teaching expertise of foreign piano teachers in Singapore

YU XINTIAN*, KITAMURA Katsuro**

* Graduate School of Educational Informatics / Education Division, Tohoku University

** Graduate School of Educational Informatics / Research Division, Tohoku University

ABSTRACT

The purpose of this study was to explore teaching concepts and behaviors perceived to be important for their teaching expertise by foreign music teachers who lived in foreign country.

Four foreign piano teachers in Singapore were selected as the research objects. In-depth, semi-structured and open-ended interview were conducted with four piano teachers in Singapore to determine their perceptions of effective teaching behaviors within the training environment. Sessions were transcribed verbatim then analysed using qualitative analysis method.

Nine sub-categories were grouped into three categories, (a) re-construction of the role of teachers, (b) shift the viewpoint from teach to learn, and (c) continuous attitude toward teaching expertise